

評 選 門 部 説 小

感想

佐伯一麦

受賞作「夏影は残る」は、この賞の選考に加わった中で、最も文章に生彩が感じられた魅力ある作品である。人里離れた土地に、通信制の高校生の主人公は住んでおり、庭に入ってくる動物は、たぬきのほかに、猿、いのしし、むささび。へたぬきはあまりに臆病で小さくて、ほかの動物とは性質の異なる生き物だった」と、てんちゃんこと主人公は感じている。彼女の独特の感性でとらえられた感覚——「へたぬきの」と「動物」はちがう。「あー」としか言いようがないことはある。半音低くなつたせみの声。会話は甘つたれたコミュニケーション……、それらが読み手にも新鮮な世界を開示するかのようであり、思春期に確かに遭遇していた「ソレ」の痕跡を我が身の裡にも探る思いとなつた。

佳作の「この世の果て」は、認知症になつた妻を介護する主人公の様々な思いを、写経する経文と重ねるところに工夫があつた。彼はニュータウンから故郷の輪中地帯の村へと帰り、そこで妻を見送る。「枯れた茎が痩せた骨のように水の引いた泥田の上に突き出ている」蓮根田の光景などが、くつきりとまぶたに浮かび、人は土に還る、という思いをしみじみと感得した。「誤配」は、「年賀をこする」といった専門用語を交えて描かれる郵便業務の内情が興味深く、楽しく読める作品だつた。同僚に疑いを向ける主人公に対して局長が言い放つ、「管理職の一番大切な仕事は（略）部下を信頼することだ」というセリフが決まっております、事の顛末が手紙によつて明らかになるのもよかつた。

選評

長野まゆみ

受賞作の「夏影は残る」は、ことば遣いに特徴があつた。語り手の「てんちゃん」は十六歳の通信高校生。「生い茂る木々のあいだを間借りするように暮らす」集落で日々を過ごす。あるとき、草木に覆われた「けもの道」でソレとしか、形容しようのない正体不明のものと出会う。いっぽう、彼女と同居する叔母は眠っているあいだにしばしば正体不明となつて歩きまわり、手にふれるものを容赦なくなぎ払う。テーブルの上のピクルスの瓶が犠牲となる。その夏野菜を「とまときゅうりおくらなす」と表現し、こぼれるようすを「ぼどろろろつ」と思いきつた擬声語で描く。目覚めていれば頭脳明晰で生真面目な人である。この叔母との「かみあわなない」会話と、それでいて親和性を示すやりとりが面白い。隣人がくれる桃が多すぎて「冷蔵庫にぎっしり詰まっている」といった描写も巧みだ。ソレは「てんちゃん」が新しい一歩を踏み出したときに消える。ことばの感覚の新鮮さを評価したい。

佳作の「この世の果て」は半生をニュータウンで暮らした主人公が、認知症となつた妻をつれてふたたび故郷へもどる話。周りとのつながりが薄い個人主義に満足していたはずの人が、往きつく「果て」の見える土地で、共同体に安らぎを感じる。現代のテーマだと思ふ。

もう一つの佳作は「誤配」。まちがって配達された手紙が、かかわつた人々の日常を波立てる。推理仕立てで面白く読ませる。春の嵐に吹かれた桜が花いかだをつくるように、めでたく穏やかな着地がよい。